小説視写「走れメロス①」　太宰治

名前（　　）

▼ふと耳に、水の流れる音が聞えた。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上って、見ると、岩の裂目から清水が湧き出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手で掬って、一口飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労回復と共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑わず、期待してくれている人があるのだ。私は、信じられている。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ、メロス。

＊字数の関係で、削除や表記を改めたところがある。

▼